

第2回「教学と現代10」(ヨーロッパの宗教事情と天理教の伝道)

報告：辻信一郎・天理教海外部翻訳課員

法王交代後のヨーロッパと「世界宗教者平和の祈りの集い」

新しいローマ教皇とバチカンの動き

タイトルでは「法王」となっているが、日本のカトリック中央協議会では、「教皇」という称号を用いている。このほうが「教える」という職務に相応しいので、本報告でも以下、教皇という言葉を用いる。

フランシスコ教皇は、生前退位したベネディクト16世の後を継ぎ、2013年3月に第266代ローマ教皇に選ばれた。彼は、神父による性的虐待やバチカン銀行の不透明な資金管理と運営、「バチリクス」事件とも言われる機密文書漏洩問題など、多くのスキャンダルに揺れるカトリック教会内にあって、さまざまな改革の動きを始めていられる。

フランシスコという名前は、清貧と貞潔に生きたアッシジの聖フランチェスコ(フランシスコ)にちなんだものである。彼はアルゼンチン出身で南米初の教皇であるが、アルゼンチン時代もアパートで自炊をしており、教皇になってからもいまだ教皇宮殿ではなく、他の司祭たちと一緒にゲストハウスに住み続けている。また、教皇直轄の諮問機関である枢機卿評議会のメンバー選出にあたっては、従来の欧米中心からコートジボワール、チリ、フィリピン、ホンジュラスからも入れて世界全体に目配りした人選になっている。

こうしたところから、フランシスコ教皇が改革に積極的だというイメージがメディアで盛んに取りざたされているが、実情は必ずしもそうではない。上記のスキャンダルに対して、教皇は必ずしも迅速に対応できてはいない。避妊具の使用、同性愛、人工妊娠中絶問題については、いずれも否定的な態度を取り続けている。また、聖職者の独身制についても、カトリックでは司祭は純潔を守るべきという原則を崩さず、従前通り独身男性に限ると言明した。とくに最後の点は女性司祭を認めないということなので、リベラル派のカトリック関係者をいたく失望させるものだった。

それゆえ、カトリックの改革・変化は限定的なものにとどまる。そもそもローマ教皇庁は聖職者からなる組織であり、教会のあり方、聖職者のあり方については伝統的な価値観を出るものではない。ただし、フランシスコ自身は非常に聡明で魅力的な教皇であり、一部の者のための教会ではなく、万人のための教会に変えたいという彼の思い、とくに貧者とともに歩む教会でありたいという姿勢を貫いていることで、多くのカトリック信徒たちの支持を得ているのである。

「世界宗教者平和の祈りの集い」

「世界宗教者平和の祈りの集い」は1986年に第1回目が開催された。天理教はこの時から公式に参加している(1991年からは毎年参加)。これはヨハネ=パウロ2世がアッシジで始めたもので、その後、聖エジディオ共同体が開催主体となり、現在に至っている。第1回目の時、実は天理教には招待状は届いていなかったが、カトリックの諸宗教渉外局の尻枝神父から

の招きで天理教も参加する運びになった。この背景には、尻枝神父と天理教大ローマ布教所の山口英雄所長との交流があった。

今回は第27回目の「世界宗教者平和の祈りの集い」で、日本からも伝統仏教、新宗教の多くの教団関係者が参加した。辻氏は通訳として尽力する中で、この世界の宗教者同士の交流の場が異文化交流の場であることをつぶさに観察することになった。

そもそも対話とは、相手を尊重し理解することである。相手の話を聞き、受け入れ、人と人を結びつけることが基本になる。宗教間対話も同様であって、聖エジディオ共同体も、世界の宗教者たちがお互いに対話を交わすということに焦点を当てている。

ところが、そこにあるのが言葉の壁である。対話するにも通訳が必要になってくる。会場での発表は、ほとんど全員がヘッドフォンを着用し、通訳者を介して同時通訳形式で行われた。興味深いのはイタリア語が基軸言語で、すべての発表は一度イタリア語に通訳されてから、フランス語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語、日本語などに二段階でリレー通訳される。驚いたことに、英語はマイナーな言語となっている。

レセプションはローマ市内のイタリア料理のレストランで行われた。この会食の場が本当の意味での異文化交流の場になる。言語、文化、宗教の壁を超えて、さまざまな話し合いが行われた。食事中でも、お互いに会話をしなくてはならないスローフード文化がそこにある。話題のための雑学も必要だし、共通の外国語がないところでも、なんとかお互いに歩み寄って会話する力やユーモア精神も求められる。

沈黙することは無視、あるいは相手を敵対視しているとも受け取られかねない。イタリア人の英語はそれほど上手ではないが、それなりに一生懸命伝えようとする努力がある。下手な英語を使っても、決して見下されることはないことを知るべきである。

こうしたとき、積極的だったのがイスラム教の人たちだった。辻氏は、キリスト教の司祭と会話する場面を多く目撃し、これがささやかな驚きでもあった。それに引き換え、我が国から来た一部の参加者は、会食の席であまり見かけなかった。その場に居ないというのは、交流したくないという意志表示とも受け取られかねない。

握手をするにも、しっかりと強く握り、相手の目を見て少し微笑むことが大切である。立場的には守旧派であるフランシスコ教皇であるが、それでも人々の間で評判が高いのは、彼が右手で握手して相手をひきよせ、目で見つめるというところがあると指摘する向きもある。

こうした世界宗教の集まりには、天理教として今後もますます積極的に参加して交流と対話を進めていくべきである。

(文責・金子 昭)

